

リコーけあマルシェ (統合見守りシステム)

お客様事例

とぶ かぜ ね 介護老人福祉施設 十符・風の音 様

社会福祉法人 宮城厚生福祉会 様

- 設立: 1997年3月
- 本部所在地: 宮城県仙台市宮城野区田子字富里153番
- 職員数: 470名 (2023年8月現在)
- 事業内容: 高齢者福祉事業、障害者就労支援、保育事業
- 運営施設: 高齢者施設、障害者施設、保育所施設など計14施設
- URL: <http://www.kou-fuku.or.jp/>

1997年に設立以来、「乳幼児から高齢者まで安心して育ち暮らすことのできるまちづくりを広く市民とともにつくりあげる」を掲げ、子ども、障害児者、高齢者の福祉施設の事業を提供している。

とぶ かぜ ね 介護老人福祉施設 十符・風の音 様

- 開設: 2005年4月
- 所在地: 宮城県利府町葉山1-53
- 職員数: 67名
- 床数: 特別養護老人ホーム50床、ショートステイ20床、デイサービス約25名
- URL: <http://www.kou-fuku.or.jp/kaze/>



社会福祉法人宮城厚生福祉会
業務執行理事
法人本部 事務局長
榎 文武 様

見守りセンサーを一括チェックして介護業務の負担軽減へ

宮城厚生福祉会様は、宮城県で事業展開を行う社会福祉法人で、介護老人福祉施設「十符・風の音」を運営しています。十符・風の音では、介護現場の職員の負担軽減と利用者の安全性の向上を目指し、各社のセンサーやカメラを一括管理できる統合見守りシステム「リコーけあマルシェ」を導入され、介護業務の負担軽減を実現しています。「リコーけあマルシェ」の導入と運用について、同会理事の榎 文武様と十符・風の音の國井良子様、糸井悠様にお話を伺います。



導入の背景

- 1 利用者の行動の見えない面は行動履歴と状況から判断してきたが、今後の事故防止にもつながる状況把握が必要と考えた。
- 2 福祉の業務は労働力に頼ることが多く、労働負荷の軽減につながる環境整備のためにさまざまなICT導入を検討してきた。
- 3 多種多様な介護システムがあるが、機器ごとやメーカーごとの管理が必要になると操作や業務の負担が増えてしまい、かえって導入が難しくなる課題があった。

運用の効果

- 1 家族も知らないような利用者の行動の実態と、インシデントや事故の**正確な状況が分かる**ようになり、**リスクアセスメント**を的確にできるようになった。
- 2 現場の**安全・安心と負担軽減**につながり、業務の改善やさまざまなアセスメントでの活用が進んでいる。
- 3 各社のセンサー製品を**一元管理**して利用者の状況をチェックすることができるようになり、**介護職員の情報共有**も進められた。

業務効率化・職員の負担軽減・リスクマネジメントをスマートに実現

介護老人福祉施設 十符・風の音(とふ・かぜのね) 様

ICTの活用を必要とする福祉業界

宮城厚生福祉会 行政執行理事 法人本部 事務局長の榎 文武様は福祉業界の現状について次のように説明します。「日本全体の社会情勢として少子化・高齢化が進み、福祉業界の重要性や必要性がとて高くなっていると感じています。労働集約型産業で、労働者の力が主たる事業の大半を占める業界状況で、特に人員不足の中でICTをどうやって活用していくかを考えなければなりません。福祉業界のイメージは社会貢献ややりがいのある仕事というほかに、厳しくてきついというイメージもあり人が集まりにくい分野です。一方で仕事にやりがいを感じ、社会貢献をしたい学生もたくさんいます。そのような方々に安心して福祉業界を目指して働けるような労働環境や労働軽減にICT活用の必要性を感じています」

介護でのICTの可能性について榎様は、「福祉業界では、ICTが労働力の代わりのようなイメージを持たれることもあります。介護福祉業界で働く労働者をサポートするために必要な技術として重要と考えています。ワークライフバランスの点からも、きつい、厳しい、というイメージを払拭するためにはICTが必要だと思えます。リコーけあマルシェ導入の検討を始めたきっかけは県の補助金制度があったからです。デモを見て、利用者の安心安全と労働環境の整備に使えるのではと考えました」

事故予防と労働環境の改善の両立を目指して

「未然に事故を防ぐケアを目指して、介護職員はプロとして利用者と接していますが、事故やインシデントの経験を何度もしてきました。実は事故のほとんどが1人の職員が複数の利用者に対応して全ての利用者を見られていない状況で起きます。事故が起きれば事故の理由を推測して事故検証やご家族へ報告しますが、常に全ての利用者を見続けるのは難しいものです。労働の負荷軽減と共に、事故やインシデントを未然に防ぐことを特に重要と考え、利用者の行動が見られるアセスメントの手段として、リコーけあマルシェを選びました」(榎様)

介護業界ではICTのシステムや介護ロボットなどがどんどん先行的に開発されている状況で、これらをずっと検討してきた榎様ですが、「一つのシステムや一つのロボットで解決できないのが一番の悩みでした。リコーけあマルシェは他社の複数のシステムを一つのプラットフォームで管理でき、かつ一元化できます。これは職員の労働軽減にもつながりますし、利用者の安心安全を維持するにも非常に役立てられると感じました」

記憶や推測だけに頼らない状況把握が必要に

宮城厚生福祉会が運営する介護老人福祉施設 十符・風の音様の介護係長 國井良子様は「家と同じ生活をしていただくことを大切にしていますが、ショートステイでは利用者が80人位で、情報共有ができないとうまくいかず、家とおなじように過ごせなかったという声や次の利用につながらないという難しさがあり、職員にとっては緊張感もあります」

リコーけあマルシェ導入以前の介護環境について國井様は、「以前はナースコールだけの対応でした。利用者のナースコールや浴室の職員からの応援など5つくらいのナースコールが重なることがあり、どこから行くかをその場で判断して手分けして対応していました。ナースコールの意味が分からない利用者さんもいて、ボタンを押せる場所でないや押せないで、本来必要な時にボタンを押さなかったりボタンを押さずに動いて転倒したり、どこかに行ってしまうような事例は数多くあります」。介護の現場では、特にインシデントや事故発生時に、推測や記憶に頼ることへの不安も感じます。「ショートステイでは、ご家族は送り出した時と同じように帰ってきてほしいという大前提があります。もちろんのことなので、そこで転んでしまって骨折してしまったとか、受診が必要となったりすれば、ナースコールだけでは転んだ状況を見ていないので、『こうだと思っんです』という報告がほとんどで、ご家族の納得が得られないこともありました。利用者の状態についての職員の精神的な負担は大きいと思えます」(國井様)



各種センサーのメリットを活用

同施設の化後リーダー 糸井 悠様は、リコーけあマルシェ導入後に、実際に事故件数が減ったとそのメリットに触れます。「ベッドセンサーは起き上がった時点でスマートフォンが鳴るので、転倒のリスクがまず軽減されるのと、体重も量れるので、毎月の体重測定で無理に起こさず入居者さんの体力的な右端を減らせるのは職員にとってもすごいことだなと思いました。カメラは同時コールの時に、実際に画面を見て、すぐ必要か待ってもらえるかの優先順位がわかるので、職員の精神的負担が減ったかなと思います。バイタルセンサーは睡眠が結構細かくなると職員の訪室で起こしてしまうことがよく申し訳ないのですが、センサーを入れることで睡眠をしっかり確保できるのは本当にありがたいと思います。」(糸井様)



「バイタルセンサーは心拍が本当に小刻みに記録されてグラフになるので、職員の目では見えない細かいところまで記録をたどれます。最後まできちんと見られて、ご家族にきちんと説明できるのがすごくよいなと思います」(國井様)

「十符・風の音では、カメラ70台、ベッドセンサー15台、バイタルセンサー5台、全室を網羅するアクセスポイント50台設置しています。職場との意見交換でも使いやすくなった面は伝えられています。ただ、いくつか課題はあると感じていて、職員とリコージャパンと情報を共有しながら、安心安全をめざすシステム構成に少しずつ進化していればと思います」(榎様)

「リコーけあマルシェ」で様々な見守りデバイスを一括管理

